

心

宗

慶次郎

岳

郎

御呼捨了願い  
ます



家が燃えている。

区画整理も未だ手も付けられていない、人が擦れ違えもしないような露地を幾角か曲がった先の民家である。

区画整理も未だ手を付けられていなような露地の先であるから、おそらく戦前からと思われる古い民家が軒を寄せ合うように建ち込めている。

冗談かと思えるほどの距離に、急行してきた消防関連の車輛が幾台となくサイレンを鳴らしている。暴れている火が、サイレンの音に氣勢を殺がれて静まるのを待っているのかも知れない。

池袋からの旧街道を少し入った地域である。近くにそれなりの大学がいくつかあったりする。最寄りの東武東上線の駅前あたりでは、それなりの学生たちが辺りを憚らず傍若無人に振舞っていたりすることがある。

そんな学生たちも近寄るのが怖いのであろうか、幾折かする露地の手前で、携帯電話で遠くから写真を撮ってみたりしている。

「火事、なう！」彼らにとってはどうだか知らぬが、四十を超えた人間には場違いに思え、振りかざす勇気を持ち合わせているならば、頬の一つも引っ叩いてやりたいような陽気な声で、いま撮った写真を誰かと電話で話している。

健介はいつの間にか紛れ込み、知らぬ間に一員となっていた野次馬の一団から抜け出した。

健介がそこにいて、健介が何かの役に立つことは有り得ない。

健介がそこにいて、健介が何か作業の邪魔になるようなことはほぼ必然のような気がした。

誰かに何かを言われてから、そこをどかなければならぬ無様さを畏れた。

しかし一団を為している若い野次馬共を同じように、どこかに引っ張っていく勇気がない。或いはそれは勇気などではなく、体力で済むことなのかも知れない。何れにせよ、そんな体力も持ち合わせていない。ついでに思えば、そんな器量もない。

消火活動も始まっていない火事が、どのような失火であるか知る由もないが、健介は得も言われぬ不条理を覚えた。

健介なりに一日を忙しく働いて帰り、近くの小料理屋に夕食を兼ねた一杯を呑みに出て、野次馬の一員にされかけた。それは健介自身にも、近くの火事に対する好奇心のようなものがあつたのは確かだ。だから、そこまでは仕方がない。

勇気がない、体力がない、器量もない無様な四十男であることを唐突に突き付けられたことに不条理を感じる。

誰かが口にして健介に言ったわけではもちろんない。

それだけに・・・、それだけにいまの自分を正確に客観視させられてしまったことに、不愉快

な憤りを感じる。 猛烈に・・・。

小さな駅の小さなロータリーのバス停裏にある、小さく「侘助」と提灯を張った縄のれんを健介はくぐった。

「っらしゃい」威勢よくフェードアウトしていく店の主の声が、健介の重くなった頭だか肩だかにふりかかる。

入口の側、カウンターの一番手前に座ると、主がコップにサントリーのプレミアムモルツを注いだ。

「俺は・・・」

言いかけた健介に、主が手前二番目から全ての席を左腕を振って示した。右手は握られた包丁で開いた赤貝をそうじしていた。

「そのサントリーは和田の親父のだ、気にしないで吞んでくれ」

「旨いなあ」

いつもはこの店、侘助で最も安いサッポロを吞んでいる健介は、吐息がそんな言葉になって口を吐いた。

「この赤貝は柴田の奴が注文して、貝を開いた瞬間に飛び出していっちまいやがった」

主がブツクサ言いながら、山葵の茎と小さなおろし金の載った皿と、赤貝を盛った皿を盆に載せて健介の前に置いた。

「鳥谷のヤローが焼いてくれってんで、網に乗った瞬間に飛び出していっちまったキンメが直に焼けるからよ」

「俺が言うのもなんだがよ・・・、健介さん、今夜はご馳走だなあ」

「ええ」

「ビールなくなったら、新井が頼んだ、久保田の翠寿があるからよ」

「え・・・」

「いいんだよ、一度封を切ったらもう売り物にやならねえ」

「でも、戻ったら吞むでしょうよ」

「残ってたらな」

主が眼鏡のしたで少し狡そうな目を輝かせた。

普段は三十分程で小瓶のサッポロと、その日の手頃な焼き魚か煮付けでご飯を食べて出てくる侘助に、今夜の健介はカウンターのスツールに二時間弱座っていた。

健介が店に入る前に野次馬に飛び出した他の客たちは戻らなかった。

「何が楽しくて、人様の家が燃えるのを見に行くのかね」

主はアイスバスケットの翠寿を、健介と自分のグラスに小さく注いだ。

「こんだけゴミゴミした町だ。こんだけワサワサと人の多い町だよ」

主は翠寿を上等なコニャックのように小さく含んで、口の中で転がしているようだ。

「だからよ、こんだけ近くの火事でも、誰の家だかなんて皆目見当もつかねえ」

酒・・・、とくに日本酒に弱い康介は、舐めるように翠寿を啜っている。それでも「旨いなあ」と、プレミアムモルツを呑んだのと同じ言葉が、同じような吐息にのって口を吐く。

「それでもよお、たぶん大丈夫なんだろうけんども、もしかしたら、あの燃えている家の中で誰かが苦しんでいるかも知れない訳じゃねえーか。例え誰もいなくてもよお、家を一軒なくす人が必ず一人、いる訳じゃねえーか」

健介は翠寿を啜っている。

主の話は元に戻った。

「だからよおー、何が楽しくて、人様の家が燃えるのを見に行くのかね」

「明日も普通に早くから仕事なんで、今夜はこのへんで・・・」

キリもキレメもなさそうなので、健介は唐突にそう言った。

「おお、気一つけて帰りなよ」

主は大いに酔っ払った声でそんなことを言っている。

「はい、どうも・・・、で、お代は」

「んー？」

「ー？」

主は健介の肩を押して暖簾を出た。

駅前の火事でロータリーは、普段の佇まいでは未だなかった。

「大袈裟なことを言うかも知れねーけどよ、健介さん」

「はい」

「健介さんは嫌だったんだろ」

「・・・」

「人の家が燃えるのが嫌だった、それを見世物を見るように見ている連中が嫌だった、自分もそこにいて消火だか、救助だかの邪魔になるのが嫌だった」

「・・・」

「他にも何か考えたか思ったか知らねーけど、嫌だったんだろ」

「・・・」

「俺はよお、なんとなく健介さんが、いつも通りに暖簾をくぐってくれるって信じてたんだ、だから、嬉しかったんだな」

「ありがとうございます」　なんだか分からないが、健介は礼を言ってみたかった。

「いや、礼は俺の方だ、ありがとうよ。　他人の不幸せの想像もつかないような者しか周りにいねえーとなると、なんだか恐ろしいやら、胸糞悪いやら・・・」

「ありがとうございます」

「だからよ、礼は・・・」

お互いの言葉に照れた二人は、なんとなく視線を合わせるように別れの挨拶を交わした。

健介は散歩ほど歩み、立ち止まって振り向いた。

提灯を畳んでいる主が気づいた。

「それで、お代は？」

「ビール代は和田の親父から、食い物は柴田と鳥谷から、新井からはしっかり翠寿代を貰うんで心配すんな、おやすみ」

主は畳んだ提灯と、下げた縄のれんを持って店に入っていった。

健介は「ありがとうございます」と口の中で呟いた。

## 火事の夜

<http://p.booklog.jp/book/55763>

著者：宗岳

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/w244/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55763>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55763>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ